

ぼくおるるしりらありの竹席たけざし今いまのあらわりかり筆同一篋けつ席ざしも同一  
 たうじりろの燈とう襦じゆの物ものふぶらうなた表ひょう具ぐといふ道みち背せ燈とう補ほ繪えも書かかり  
 ろうやとれと輪りん補ほといふ紙し手ての物ものといふ液えきのあらわりかりてんといふあらわりかり  
 紙し綾あやといふと短たん冊ふといふ短たん笥しも探たん策さくといふ書かへ色しき紙しの要かならわりかり  
 ゆかり一い鹿か同一とく啄てつ木ぼくの表ひょう具ぐの紐ひも多おほく鳥とりの木きと啄てつ木ぼくといふ  
 といふ啄てつ木ぼくといふ柳やなぎ管くだといふ經きやう歌かの題だい又また硯えん翰はん冠かんといふあらわりかり本のあらわり  
 丁半ていはんのあらわり抽匣しゆげのあらわり又抽しゆ水すいといふ書かかり土ど瓶びんの陶たう  
 てはかり茶ちやと煮に器きあり滴てつ器きといふあらわり又水すいといふ書かへ水すいといふ  
 煙えん盃はいといふとあらわり但和わ字じたと書かへ皺しわ皮かわといふあらわり又のあらわり  
 刀たうのあらわり墓皮ぼく同一寶ほう蓋がい天てん蓋がい多おほく佛ぶつのあらわり又のあらわり  
 棺くわんといふあらわり死人しにんといふあらわり又同一棺くわんといふあらわり又外がいと擲てつといふあらわり  
 あり。輶き車くるまあり今いま大だい聖せい竹ちく格かくといふ僧そう家けといふあらわり又籠かごといふ

頭書増補訓蒙圖彙卷之十二

畜獸

此部こゝふい山さん野や人にん同一といふ  
 といふくのけと物ものとあらわり又

麒麟きりんの仁獸にぶつあり  
 賣身牛尾うりみしうび  
 一角いっかくのあらわり又壯さうと  
 麒麟きりんといふ北きたと  
 麟りんといふ生虫せいむし  
 生草せいそうをあらわり又まじり  
 聖人せいじんのあらわり又せふ  
 といふ獸ぶつ  
 といふ



頭書増補訓蒙圖彙卷之十二

○獅子シ百獸ヒヤクベ

の長ナガきり

一ヒト月ツキ小コ

五百里イハヤヒと走る

虎コ豹ヒョウ狐キツネと

食クハふ故コト

補ホ虎コ豹ヒョウと

獅子シと

怒イカり

天テン竺ダクの猛マウ獸ブ

少シウく通ツウ力リキ去キョ

ざいざいとゆ

ののありと

一名ヒトナ狻スワン猊シと

り

獅子シ



○獅シ身ミ

異イ國クニの獸ベ

多タく其ソノ形カタチ

獅シ子シに似ニく

一ヒト角ツノあり一名ヒトナ

神カミ羊ヒツと云イハふ

能ユ曲マ直チキと

嶺ミネ南ミナミ陶トウ

獄ゴクと浮ウキ射シヤ

その罪ツミと

あはれあはれの獅シ

身ミに似ニく

補ホ罪ツミの

と食クハ罪ツミな

い

獅シ

身ミ



頂書曾補州家圖東十二

○虎へくち  
 猫のおく  
 大さ牛乃  
 如く色黄ふ  
 ちて赤足や  
 く一身の力  
 赤足よりの夜  
 小一目の光と  
 教ら一目の光  
 をるる夢雷の  
 ぞくくくく  
 とくくをふ  
 上と虎一歩  
 孔と百獣恐  
 とくくといふ



虎  
 ざん

○駒虞へ白虎  
 なるその  
 尾身より  
 ながー仁獣  
 かま  
 ○豹へくち  
 虎にくくぬて  
 ちの顔よく  
 面白く毛色  
 赤黄あく白  
 きりゆわ  
 甚なり故  
 ち毛糸  
 とくく  
 又



豹  
 かま

駒  
 虞

東洋動物図説 三 大 虎 豹 類

○象の異國の  
 大獸あり  
 鼻牙まぐ  
 補 食のころを  
 くまひ  
 あの鼻より  
 吸といふ三  
 ふいきび  
 乳を大山の  
 中ふらひかり  
 牙ととる  
 てあつてつ  
 あつてつ  
 象牙といふ  
 かな



○貔の熊ふ  
 似たり象の  
 鼻犀れ  
 目尾の牛の  
 おく虎の  
 足銅鉄及  
 竹と食ふ  
 うく糸ひる  
 補 けごりの多  
 とくわき  
 夢とくま  
 りふ  
 枕ふふいて  
 貔まらと  
 名はく



頁書補川文圖書二

頁書補川文圖書二

野山草花林詩家圖考

○犀の毛豕の  
おとく蹄

三甲の  
頭馬のぞく

三角の鼻  
上額上頭上

ふわ

○熊の毛色黒く  
形豕に似たり胸

に白脂わり俗小  
熊白といふ洞窟

すいと穴熊といふ  
本もとむと本熊

い熊藩くはの  
なごろ熊膽

○狼の狗小似て大也  
顔をもとに頬白く  
赤黒く後ひ

口こつと大と  
かほく猪獸

とくり食入  
く後とく

く

○豺の狼の扱  
かや色黄中

頬白く尾か  
狼よりい

小くか  
猪獸と食ふ

悪獸



熊  
くま

犀



狼

豺

猪

野山草花林詩家圖考

五

○鹿の馬のごとくはして小あり頭長く脚細く夏至よかつ牝の角か一六月よくくみ瓜うひ好で糸をくふ秋のよよふてなまを虚勞とわさみ腰とわさめ一切の病は益あり

○麋の鹿のみかた

○鹿の秋冬山に春其沢鹿は細く小角か一黄黒色雄の牙あり

○麋の鹿めて久昔黒あり大さ小牛のし目の下に二の穴あり夜の目とよ

○鹿の羊に似て青色ありて大角の細くてあり人の指はじとて四五寸はとて



麋トビの鹿トビ小似  
 色黒  
 麋トビの香氣あり  
 補トビあつとつとつとつ  
 是トビの故トビの  
 胎トビとつひとま  
 羊トビの柔毛トビの香  
 かなとく群トビと  
 かなとく群トビと  
 あととく群トビと  
 のまトビの羊トビに  
 ちとく  
 綿トビ羊トビの  
 毛トビのどトビの  
 とつと夏トビ羊トビ  
 胡トビ羊トビとトビ同



野トビ猪トビの物トビ名  
 かなと野トビ猪トビ豪猪トビを  
 とつり不トビ潔トビと喰トビふ  
 よつて家トビとつとつとつ  
 腎トビ虚トビと補トビふ  
 豚トビの家トビの子トビと唐トビ人トビ  
 ほつて常トビに食トビと  
 野トビ猪トビの腹トビ小トビく脚トビ  
 かなと毛トビ褐トビ色トビ牙トビ小  
 てつとつとつとつとつ  
 味トビ甘トビ毒トビのトビ癩トビ癩トビと  
 汗トビ肌トビ膚トビと補トビふ  
 山トビ猪トビの項トビ脊トビに棘トビ  
 鬣トビのトビ長トビ三トビ尺トビを  
 つつとつとつとつとつ  
 つつとつとつとつとつ



○馬の火氣と受  
 てはさく火の本気  
 けさる事わく  
 と故ふ肝わく  
 膽な膽の本乃  
 精氣分り本胆不  
 足と故ふその肝と  
 くらりの死と  
 ○駒ハ馬ニ養多  
 と駒とつよ五尺  
 以上と駒とつよ  
 ○驪ハ馬の純に  
 黒さのありく  
 ろは方々  
 ○騮ハ馬の青  
 ありさ久  
 かな  
 わげるあり  
 連銭草毛  
 ○駿ハ馬の  
 色の純あり  
 としてま  
 ありかり  
 駿同  
 くらひま



頭書曾浦川文圖卷二



○驢うまのうまうま馬うまと  
 〇耳みみかき  
 馬うまなり唐から  
 〇是こゝとつゝ  
 倭やまと國くにの馬うまなり  
 〇駝たの背せに肉鞍にくあし  
 〇頭かぶかき  
 〇脚あしは  
 〇其その毛け温厚ぬくも  
 〇狐きつねの毛け  
 〇力ちからは

〇牛うしの田のりと耕かと  
 〇畜ちくカを唐から  
 〇殺ころして糸いとを依よ  
 〇野の牛うし五ご頭ごう  
 〇大おほ宰さいとつゝ  
 〇犢うしごの牛うしの子こ  
 〇犢うしご乃なり鼻はな  
 〇男おとこ根ねと似に  
 〇犢うしご鼻はなとつゝ  
 〇大おほ宰さいとつゝ



頁書...

頁書...



○ 獒犬の犬大なり  
 ちと四足あり狐  
 教といふ俗にこそ  
 と唐犬といふ人  
 ○ 犬の味鹹温毒を  
 一五腕と云ふ氣  
 とりし骨は宜し  
 ○ 獾犬の毛長し  
 杏拖獅犬といふ  
 ひくいぬかた  
 ○ 蝟鼠の綿のじ  
 脚短く尾長し  
 色青白し足毛  
 人といふ山谷野  
 に生じ猫同  
 ○ 靈猫の南海の山  
 谷小生じのりた  
 ぬこのおし陰に  
 鹿射のぞく  
 ○ 兎の爪足みど  
 かく尻の丸の孔を  
 辛平毒あり中  
 と補いぬとす  
 ○ 猿の馬のたぐひ  
 猴ふ似て臂かば  
 よく樹の枝を攀  
 ○ 猴のくちく人  
 とを腹ふ脾かみ  
 とく行とつて食  
 と湯とくま  
 けしけさか  
 とて物狐等を



○ 獺水中にむ  
 四足より短く  
 青黒く魚を食む  
 水に氣腹満  
 と治ると多食  
 ○ 貂の尻のたぐひ  
 大くして黄黒色  
 かつ毛もく  
 わたつたつたつ  
 領つて寒氣とふ  
 せ、俗に栗前と云  
 ○ 鼯小狐のく  
 肉翅蝙蝠に似る  
 脚みたく尾長  
 さ二三をるる声の  
 にかみむくつり  
 ちささにかのり  
 わつたつたつ  
 ○ 狸の尻のく  
 あく皮を剥つた  
 色一色乳色  
 ○ 海狗の膈胸膈  
 かな形狐に似て  
 尾の魚の身に  
 青白く毛のり  
 青黒く點つて  
 膈の腎の旁に  
 海狗の狸に似  
 て大さ大のそ

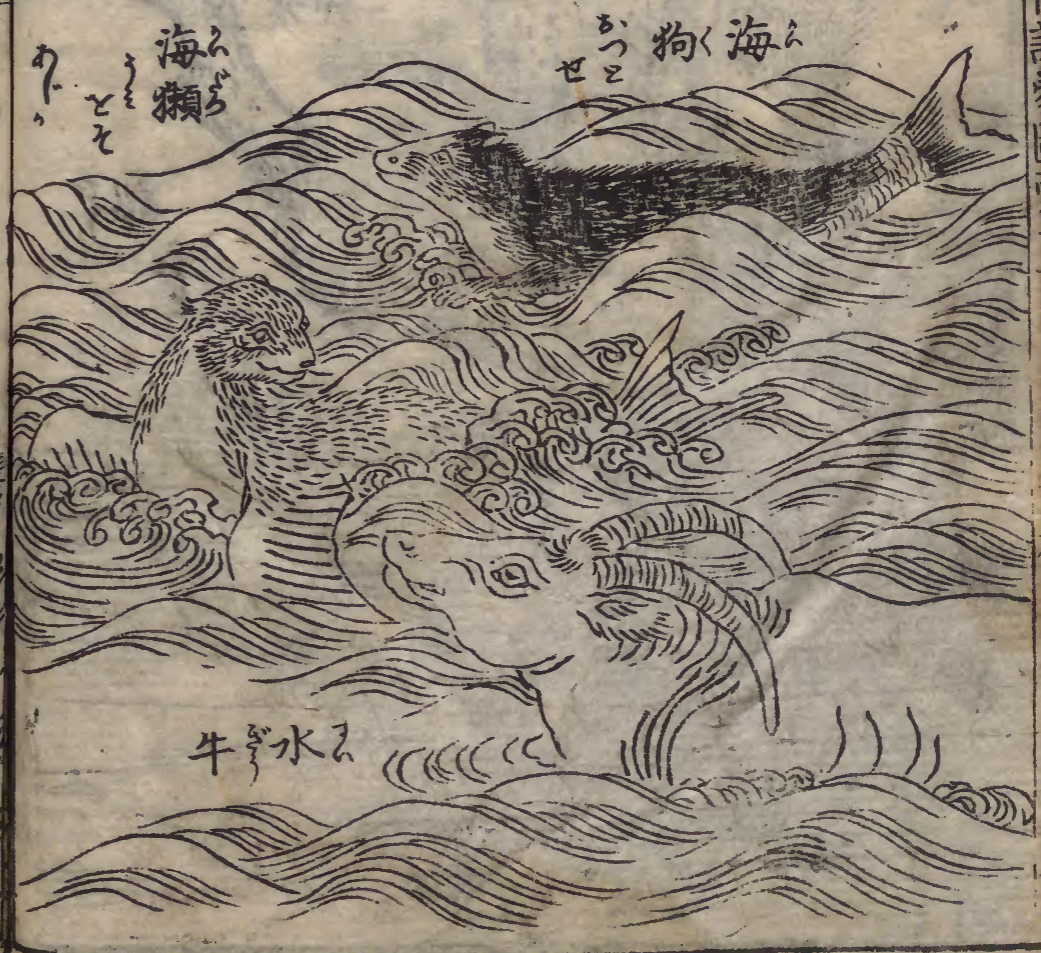


頂世曾南川水圖景十一

頂世曾南川水圖景十一

脚の下に皮のり毛のふつ  
 て濡るまじわりのついで  
 ○水牛の色をくもく腹を  
 さんごのくもく猪小ぬきり  
 あまふ食をれ清濁を  
 やり脾胃と中かひ虚と  
 おきかひ水腫と治と  
 ○猩猩の海中にむい獣也  
 毛色黄あつてさのこ  
 耳白く面と足人のこく  
 て酒飲との血をさうて深  
 ○狒々の猴年と積て狒々  
 とあつてい形人のくく  
 て大かり唇長く互踵髪と  
 被うり迅走て人と食ふ人と

○鼻の四齒のりて牙か  
 丸四後の爪のり小児乃  
 驚風てんんと治と  
 ○鼈のく糸をさう筋のら  
 されのり人さうらて痛  
 すと瘡とかな  
 ○纏うらりら伯勞の化  
 すりのり筋に似て頭を  
 のちれくく尾か毛を  
 黄黒く地中とうらてみ  
 とく食ふ日月の光とをさ  
 ○鼈の筋よりさふ筋かく  
 四足みとく尾太かりのら  
 黄あつてくくくく筋と  
 ○角のりくくくくくく  
 角とくくくくくくく



鹿の夏至に角からして  
 秋分ふけほど鹿角水  
 牛の角器よつ々  
 ○牙の齒のあぐたき  
 りのかり象の牙を  
 大いしてうん物よに  
 ぐり猪の牙の物よを  
 つてかりうふを  
 ○駿馬の頸よあご  
 てつてかりうふを  
 りんがく鬃鬃鬣鬣  
 クレハ同  
 ○蹄のけごりの足の  
 まんがり麒麟の蹄  
 の下に肉わく物よ

頭書増補訓蒙圖彙卷之十三

禽鳥

此部には山林ふとむり  
 くのちとのしとちん

○鳳凰ハ神靈の鳥  
 かな雄と鳳と云雌  
 と鳳といふ其のち  
 雜ふ似そりねい入  
 糸とそり入るる  
 又声ハ簫のそり  
 生虫と啄と生草  
 とふと相とこの心  
 竹實とく  
 鳳皇瑞鷗並同

鳳凰

